

第二十四日目

師 範：鎌倉幕府を倒した翌年から後醍醐天皇は、天皇がみずから政治を行うことができるようになり、ずいぶんはりきりました。

ところが天皇は、はりきりすぎたのか、古い昔にもどろうとしました。



支援して戦った武士たちは、それまでの財産や土地を守り、増やしてもらえと思っていました。

ところが、天皇の証書で保障された土地だけが、認められるということになってしまいました。

京都には全国の武士がおしよせて来ました。

これをさばくのに、いいかげんな基準やにせの文書が出回ったりで、大混乱になりました。

建武の新政は多くの期待を集めていましたが、その政治の中身が見えてくると、背を向ける武士がたくさん出ました。

1334年 建武の新政がおこなわれる。

この年を覚えましょう。

コン太：鎌倉幕府がほろんだ翌年だから、わかりやすいね。



ペン太：まじめなぼくが、人を変えるのではないものを、お見せしよう。



「新政の意味見よという後醍醐」

というのはいかがでしょうか。

師 範：「**いみみよ**」で**1334**を読みかえたわけですね。

後醍醐天皇の意気込みが伝わってくるような感じですね。

よく考えられていますよ。

ペン太君もなかなかのものですね。